

RR-20「史跡盛岡城跡の歴史的建造物復元に向けて」

課題提案者：盛岡市教育委員会歴史文化課

研究代表者：総合政策学部 倉原宗孝

研究チーム員：三浦陽一（盛岡市教育委員会歴史文化課）、似内啓邦（同都市整備部公園みどり課）、
神山 仁（日本城郭史学会）

<要 旨>

盛岡城は盛岡市及び本県において強いシンボルの一つである。しかしながら明治7年の廃城時や明治39年の公園整備、戦後の開発等により、盛岡城の特徴的な建物遺構等が数多く失われており、城郭本来の姿や堀の機能がわかりにくくなっている。一方、これまでの一定の調査からも、城郭建物の復元の手がかりとなる有効な史・資料はほとんど見つからず、城郭建物が写っている写真1枚が確認されているのみである。そこで本研究は、復元に向けた有効資料を探り出すことを目的の一つにする。それは非常に難しい課題であり、本研究においては同時に盛岡城跡の今後の使われ方、整備方向について市民に開かれた施設・公共空間として検討することも目的とする。

1 研究の概要（背景・目的等）

本研究の究極の目的は、盛岡市の強いシンボルの一つで盛岡城の復元に向けて有効となる資料・情報を発掘することである。これはこれまでの経緯からも非常に難しい目的となるが、今回は有効な手掛かりの一つと想定されるロングフェローハウス（ポストン）での所在について探った。また難しい課題である資料発掘と同時に、今後の歴史的復元というテーマと共に市民に開かれ親しまれる史跡のあり方について調査、検討した。

2 研究の内容（方法・経過等）

盛岡城復元に向けた資料として現在、唯一の手掛かりとなるロングフェローハウスにおける所在について調べた。また城跡整備などにおいて全国の先進的な事例について現地の観察調査・検討を行った。

3 これまで得られた研究の成果

(1) 盛岡城復元に向けた資料発掘

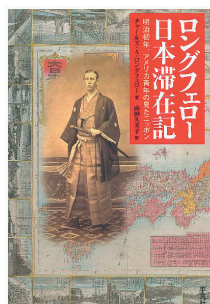
先に記したように本研究の究極の目的はお城復原のための根拠となる資料を発掘することにある。その中でロングフェローが残した可能性のある写真発掘が今回の具体的なテーマの一つであった。これについて結論から先に述べる。結果として期待されたロングフェローによる写真は残念ながら確認出来なかった（あえて言えば「期待した写真は無い」ことが分かった）。

米国人、チャールズ・A・ロングフェローは明治4年5月に横浜港に到着（当時27歳）以降、当初の予定を大きく変更しておよそ1年8ヶ月にわたり維新後すぐの日本に滞在した。その間に彼は国内各地を巡り（右図）、独自の視点から写真や記録など興味深い当時の日本の情報を残している。

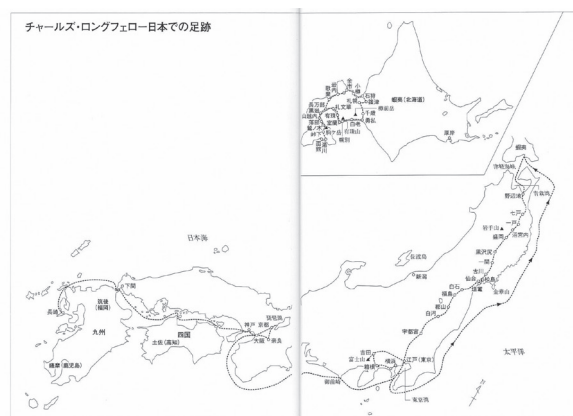
関東から北海道に渡った帰路、彼は盛岡にも立ち寄っている（明治4年10月19日）。その為、当時の盛岡城の写真が存在するのではないかという期待があった。残念ながら写真の存在は確認出来なかったが、彼が残した当時の盛岡の様子をもとに想像力を飛ばたかす事も必要である。以下、チャールズ・A・ロングフェロー著、山田久美子訳、ロングフェロー日本滞在記、平凡社、2004（下、表紙の写真）より。

「10月19日(木)・・・城は南部藩藩主の館である。・・・垣根を通過して大きい松の木の間を抜けて城の前提を横切り、途中鉄や銅で補強された重々しい扉をくぐると、間もなく城の中庭に立っていた。防壁は非常によい状態であった。二面の壁は大きく切った石で出来た高さ約50フィートの石垣で、上に銃眼の開いた胸しょうがあり、的が来襲すると木製の格子から矢が降り注ぐようになっている。全体が広い面積を占め不規則な形をしていて、火薬の時代になるまではほぼ無敵であったと思われる。・・・」

など、盛岡城の様子が分かると共に、現存する盛岡城に付むイメージが触発されるようでもある。あるいは、「・・・盛岡が前述の素晴らしい鉄瓶の産地であること、それに古い寺と城があることが判明した。・・・」「・・・盛岡は人口1,300だが、子供の数が非常に多いようだ。その家にもいろんな年齢の子供が沢山いて、既婚女性は皆胸に赤ん坊を抱いている。・・・」



左：『ロングフェロー日本滞在記－明治初年、米国青年の見たニッポン』フェローは独自の視点から当時の日本人の生活など細部にわたる記録を残しており興味深い。多くの写真も残しており、盛岡城についても期待が大きかった。下：同上 p.18-19より。関東から北海道へ、また西は九州へ日本を巡っているようだ。盛岡の行程も記されている。

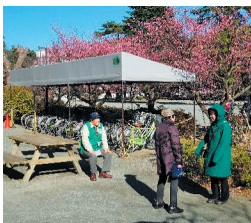


と、当時の城下町の様子も分かる。

さて、こうしたロングフェローが残したかもしれない写真への期待だったが、上記のように無いことが判明した。当初、現地に渡り調査するための費用も市では検討されたが、それに先立ちロングフェロー・ハウスに専門家・通訳を通じて所在の調査依頼がされた。ハウスによる調査の結果、ロングフェローは「盛岡・岩手では写真は撮っていない（＝盛岡城の写真は無い）」ことが知らされた。

またその他の資料の可能性について、明治・昭和初期の物はオークションで処分されており（特に貴重品・調度品など）、それらは誰に売られているか分かるが、古文書については「ひと山いくら」といった形の取り扱いのため散逸して分からない状況にある。市所有の7万点については過去に悉皆調査を行ったが見あたらず、県図書館及び中央図書館（この2カ所が主な所持場所となる）についても台帳を作って調べたが見つからないという現状がある。結果として、写真をはじめとする復原のための資料・情報集めは今後への期待を込めた課題として残った。

(2) 歴史的意味・価値を維持した市民に開かれた空間へ
復原に寄与すべき資料探しについては上記の状況だが、同時に史跡整備のあり方や歴史の意味・意義を今日的に捉えつつ、市民にとって親しまれ有効な史跡空間にしていくことをにらみ、全国事例の現地視察も行った。史跡保存については時代の中で捉え方が変遷している。お城の象徴ともされる天守閣については昭和30年代以降、町のシンボルとして鉄筋コンクリートによる復原が全国的に展開された。その多くが耐用年数を迎えていると共に、「真に意味有る復原とはなにか」もあらためて問われている。形だけ（RC造）でよいのか、天守閣が必要なのか（無いことも自然ではないか）等、難しいが、今後の市民社会における価値観・スタイルを磨く上でも重要な課題である。最近では名古屋城を木造により復原するか



小田原城(左上)、
現在も発掘作業(上右)。ボランティアの方々による小まめな案内や気配りは重要・必要だろう(写真下左)。町にたなびく幟等思いも感じる。

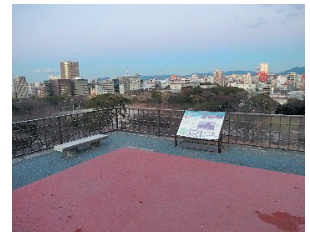


芸術分野やIT技術を活用したビジュアルな表現も来館者の興味をかき立て、お城と共に、歴史や町への興味関心を高めるものと思う。原寸大での素材・仕上げに直接触れる工夫もみられた。

否かも話題になっている。

こうした整備の上で歴史性・市民性等の点で小田原城は注目される一つである。復原に際し歴史文化財として丹念な調査が現在も進められているのと同時に、城が所在する市民が丸となって復原とまちづくりを盛り上げようとする機運も感じられる。城や都市の規模等、天守閣の有無などからも一概に比較は出来ないが、参考と共に刺激になる。

天守閣の復原を目指す盛岡城と比較して、福岡城の場合は天守閣のみが残っている史跡である。天守閣部分には見晴台が整備されており、そこから町を眺めることが当時の人々(城主)の立場・思いを喚起させるようで興味深い。「残すこと」や「保存」に対する意義、またその現代的な利用方法・価値など考える示唆がある。



福岡城。石垣に誘われるように本丸部分に向かうと、当時の天守閣部分が整備されている。博多の町を一望する眺めが当時の城主の思いに重なるようでもあった。あえて天守閣は造らず(現存の)有効な整備・活用もあるかも知れない。

お城の整備と共に周辺環境あるいは関連アクセスとの一体的な整備を脱むことも重要だ。都市規模は異なるものの、大阪城は周辺施設も意図的に整備されているようだ。



大阪城：さすがにというか環境客の数は群を抜く(大阪城を舞台にした大河ドラマの影響もあるかもしれない)。周辺の複数の駅からのアクセス、関連施設などお城を中心に周辺が一体的に整備されている。お城に向かうまでの街から見える様子もシンボリックだ。バリアフリーへの配慮(写真左)も本格的である。

そのほか全国には多くの魅力的なお城とその保存・活用が見られる。その主旨・内容・規模などはそれぞれだがいずれも都市のシンボルとして位置づけられている。

3 おわりに

今回残念ながら盛岡城復原に直接貢献する資料の発見には至っていない。これは悲観されるものではなく、今後への期待を孕む課題として残った。同時に盛岡城の今後の保存・活用のあり方には様々な示唆が得られた。復原の手段・技術のみではなく、保存のあり方、意味・価値まで含めた議論がさらに必要であろう。資料収集と共に引き続き取り組みたい。